

随 想

三上達也先生のご指導を受けた30年 －研究と生き方－

塚本 充

I. はじめに

三上達也教授が2014年9月に急逝されて1年半近くが経った。著者は、大学時代にはじめて三上達也教授（これ以降、「三上先生」、もしくは「三上さん」と表記）に学部生受講の授業でお会いし、その後、大学院生であられたころの大学研究室に配属され、その後30年以上にわたって、ご指導と影響を受けてきた。

本稿では、三上先生と著者に関する主に井上研究室在籍時代を中心に、三上先生が私に与えた影響について述べ、今は亡き三上先生の偉大さを改めて振り返ってみようと思う。エッセー風のいくぶん砕けた表現となることと、第一人称を著者と私とが混在することをお許し願いたい。

なお、三上先生の影響を受けて始めた自身の研究と最近の研究についても述べる。

II. 先輩としての三上先生

II.1. 立命館大学における先輩・後輩の関係

私が三上先生ご本人から聞いた話では、京都にある超難関旧帝国大学への入学を目指していたそうである。複数回入学試験に臨んだが、結果として、立命館大学への入学になったとのことである。決して不本意入学ではなく、大好きな立命館大学に三上先生は、学部では6年間在籍されたことがその根拠としてあげられる。

ところで、立命館大学における三上先生と著者との先輩・後輩関係には、以下の学部・大学院・研究室の3つのカテゴリに分けられる。

- ① 立命館大学理工学部電気工学科の先輩
- ② 立命館大学大学院理工学研究科博士課程前期課程、および後期課程の先輩
- ③ 立命館大学理工学部井上和夫教授の研究室の先輩

著者にもっとも強い影響を与えたのが、③の関係であることは言うまでもない。

ただ、実は、大学入学以前の以下の④の先輩・後輩の関係が、現在の著者の社会的立場の礎になっていることは否めない。

④ 富山県立高岡高等学校普通科の先輩

私は、立命館大学の学部3回生後期に次年度卒業研究の研究室配属に際して、いったん、第一希望以外の研究室に仮配属された。しかしながら、その後、研究室の教授が研究の指導をなさっている大学院生の三上さんが、著者の高等学校の先輩であることを何らかのルートで知られることとなり、試験やレポートなどを再評価していただいたのであろうか、その結果、4回生の4月から正式に当時の井上和夫教授の研究室に所属させていただいた。もし、三上さんが井上研究室の大学院生として所属されていなかったら、私は、別の人生を歩んでいた可能性が高いと思われる。

なお、高等学校では、三上さんと私は、同時に在籍はしていない。

II. 2. 京都科学技術専門学校講師としての先輩・後輩

著者は、大学卒業後、大学院理工学研究科博士前期課程電気工学専攻に進学し、ここでも三上さんの後輩になった。大学院1回生の時点で、三上さんが講師を務められていた京都科学技術専門学校（京都科技専）の講師に推薦していただき、面接ののちに、採用された。学費を自身で稼がなければならないという著者の事情に配慮していただいたものと確信している。

京都科技専では、前期課程1回生から後期課程3回生までとその後の1年間の研究生の6年のあいだ、おもに「電気工学科」「電子工学科」「電気通信工学科」の「電気工学」「電子工学」に関わる講義と「電気・電子工学実験」を担当した。当時としては、比較的安価であったとはいえ、立命館大学の学費をねん出できたのも、三上さんが京都科技専に私を講師として、紹介してくださったことに他ならない。

また、授業での留意事項としては、学生との年齢が近いのでなめられないように毅然とした態度をとることや、教え方として内容や方法にごまかしがあってはならないことを強く念押しされた。ほかの先輩からも、教える内容に関しては、そのことがらを10年以上教えているような姿勢で学生に向かうようにご教示いただいている。これらアドバイスは、「授業に際しては、十二分な準備をなささい」との先輩の忠告と受け止めており、30年近くたった今でも心掛けている。

なお、先日も前を通りかかったが、2006年に京都科技専の民事再生の開始が決定し、別の学校法人が事業継承しており、三上さんが立命館大学とは別の場所で「三上先生」として教鞭をとられた学校が消えたこともあり、同じ講師経験者としては、いくぶん淋しい想いである。

II. 3. いくぶん理不尽なできごと

まれに、三上さんは、井上研究室の後輩の大学院生たちにとって、いくぶん理不尽かもしれないことを言い出されることがあった。

ひとつ目は、詳細な時期については記憶が定かではないが、1990年前後の私が博士課程後期課程の学生であったある日の午後、急に「明日、みんなでバーベキューをしよう!!」と言い出された。そして、次の瞬間「塚本、森、琵琶湖のどこかでバーベキューのできそうな場所を

探して来い!!」と命じられた。「森」とは、立命館大学政策科学部の森隆知先生のことであり、自家用車を持っていることがご指名の理由のようである。

行き帰りの車の中でも、森先生と私は、多少ぶつぶつ言いながら、何とか任務を終え、暗くなって、京都に戻った。私は、車の助手席に乗っていただけだったが、行き帰りの50キロ以上を運転された森先生の心中を察すると心が痛んだ。次の日の志賀駅付近でのバーベキューが天候にも恵まれ、参加者に好評だったのが何よりの救いであったことは言うまでもない。

ただ、それまで、井上研究室のバーベキューは、京都市内の保津川の河原でおこなわれていたが、そのできごと以降は、志賀駅付近の琵琶湖の湖畔でおこなわれるようになったので、「いつも通り」「恒例」といった保守的な考えにとらわれず、新しいことに挑戦し続けることの大切さを当時の三上さんに教わったような気もしている。

そして、二つ目のできごとは、忘れもしない2013年10月の井上研究室同窓会でのことである。ここでも、森先生と私がかかわっているのであるが、研究室の同窓会の幹事を任せられており、同窓生の出欠確認往復はがきの印刷、投函等を私が担当し、森先生には、会場確保と返信の受信者となっていただいて、出席者の取りまとめを担当いただいた。

同窓会当日には、森先生が参加者名簿を作成・持参されており、参加者に配付し、受付の出欠確認にも利用した。そこには、三上さんの名前はなかった。同窓会の常連の方々も、「三上君は来ないのか??」といった言葉を発せられていた。

井上和夫先生ご夫妻や関係者など、出席予定の方がほぼ揃ったころ、「えへっ」といった薄気味笑いを浮かべた三上さんが現れた。受付一同が、啞然としている中、三上さんの一言が印象深い。「おまえ、俺が同窓会に来ないと思っているのか??」と。同窓会案内のはがきを大学あてに送付しており、返信をいただいていることを伝えると、「メールボックスなんか見ると思うなよ!!」とお言葉をいただいた。幹事である当方どもが、三上さんというヒトの性質・性格・生きざまを完全に理解していなかったことに気づかされた。

当然ながら、出席予定のない方の訪問は、想定外であり、余分な料理も用意されていない。幹事の森先生が、あらかじめ「+1」で人数予約はしてくれていたが、出欠が怪しいという連絡のあった方がみえて、余分はない。ただ、会場のホテルと早めに会場を後にしなければならぬ同窓生のおかげで、足りない分の料理は、なんとか工面できた。

これも、予期せぬ出来事への対応力、まさに「生きる力」を持つことの大切さを三上さんが教えてくれたのかと、今となっては、好意的に考えている。

Ⅲ. 三上先生の記録

Ⅲ. 1. 大学院時代の研究

三上先生や私が在籍中だった1990年ごろは井上研究室では、毎週、研究室の院生のゼミがおこなわれており、数週に1度の研究進捗状況を発表していた。また、電気工学専攻の博士課程前期課程と博士課程後期課程の大学院生全員が出席の「電気工学教室ゼミ」という研究発表

の場が、前期と後期に設けられており、大学院生は、いずれか1度はある程度のもまとまった内容の研究発表をおこなっていた。

電気工学教室ゼミにおける三上先生の大学院時代の研究関係のレジユメの写真を図1に示す。三上先生は、大学院生時代より、一貫して、コンピュータを用いた自動編曲を研究テーマにされており、その編曲をおこなうコンピュータシステムを「MUSAS (ミューザス)」と名付けられていた^{1),2)}。

なお、グレースケールなので判別がつかないが、図1の右側2編と左端の1編は、当時「青刷り」と呼んでいた「青焼」「青写真」とも呼ばれる青色のコピーである。当時のゼミ資料の実物が現存するところが、著者の物持ちの良いところを示している。

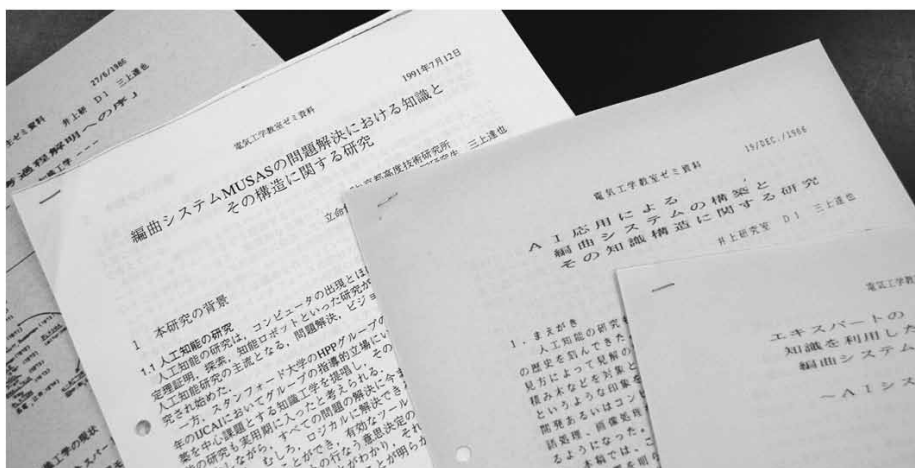


図1：三上先生の大学院時代の研究関係のレジユメ

Ⅲ.2. 個人的なモノ

富山県立高岡高等学校同窓会では、数年に1度の割合で、同窓会の会員名簿を刊行しており、その最新の会員名簿と三上先生の住所の記述箇所を写真を図2に示す。図2(a)は、名簿の表紙であり、図2(b)は、三上先生が掲載されている箇所である。以前に住まわれていたマンションの住所になっている。名簿では、同窓生が、旧制中学、新制高等学校の卒業順に編集されており、卒業時のクラスごとにまとめて掲載されている。図2(b)より、三上先生は、高等学校普通科の27期生で昭和50年卒業、卒業時に3年1組であったことが記載からわかる。

なお、三上先生の前の方の氏名と住所は、処理を施してある。



図2(a)：富山県立高岡高等学校の最新の同窓会会員名簿

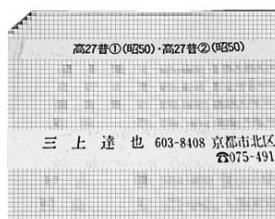


図2(b)：同窓会会員名簿の三上先生の記述箇所

Ⅳ. 1. 立命館大学在学中の研究について

大学院博士課程後期課程時代の三上先生は、前期課程の大学院生や卒業研究生らを「知識工学班」の構成員として東ね、井上和夫教授のもとで、研究指導をされていた。「知識工学」や「人工知能」という言葉や概念を知り、興味を持ったのも三上さんの影響である。

私は、知識工学班ではなかったが、のちに三上さんが京都高度技術研究所の研究員のころに主宰する研究勉強会「COHDA プロジェクト」に参加した。あまり長続きはしなかったが、「COHDA」は、「ad hoc」を反対に並べたもので、その後の通り「その場限りの」「場当たりの」研究会であったが、参加メンバーのそれぞれが、京都高度技術研究所で開催される研究勉強会では、かなり刺激を受けて、修士論文や博士論文の作成のための研究に臨んでいた。

私も、三上さんのご指導やご支援もあって、1990年に博士の学位論文を提出できた³⁾。研究分野としては、大括りでは「情報系」に分類され、具体的には、コンピュータを用いて人間のような知的な判断や処理をおこなう際に知識をどのようにしてコンピュータプログラムに組み込むかについて探究する「知識表現」という分野にあたる。私の場合には、特に三次元形状を主な対象としたために「形状表現」に関する研究であると説明している。

Ⅳ. 2. 福井大学での研究について

著者は、1992年4月に現在の教育研究の場である福井大学に赴任した。教員養成を目的とする課程といわれる「ゼロ免」といわれる教員免許状の取得を目的としない課程とが併存する学部であったために、立命館大学大学院在学中の研究を進めながら、研究内容を教育関係に路線変更していった。

1992年以降、2005年前後までは、MS-DOSやWindows上で稼働する学習支援システムの構築や運用を研究の柱として据えていた。それ以降、現在までは、学習支援システムの構築の一環として、Webブラウザ上で稼働する「電子教材」「デジタル教材」と呼ばれる学習支援のためのコンテンツ作成やそのひな形作成が中心となっている。

そして、2015年度から、新たに「ICT活用指導力養成支援環境に関する研究」を開始しており、まさに、「教員養成系」の実践的な研究となっている。

現在、構築を試みている「ICT活用指導力養成支援環境」を図5に示す。図5では、通常の学校で構築が進められているICT活用授業環境に著者らが構築している「電子教材配信システム」を連携させ、大学教員の指導の下で、授業を受講している学生が、模擬授業をおこない、ICT活用指導力を培うことを目的としている。電子教材は、著者らの研究室で独自に開発を進めているものが中心であるが、安価で、できの良い教材があれば、市販品も活用する。

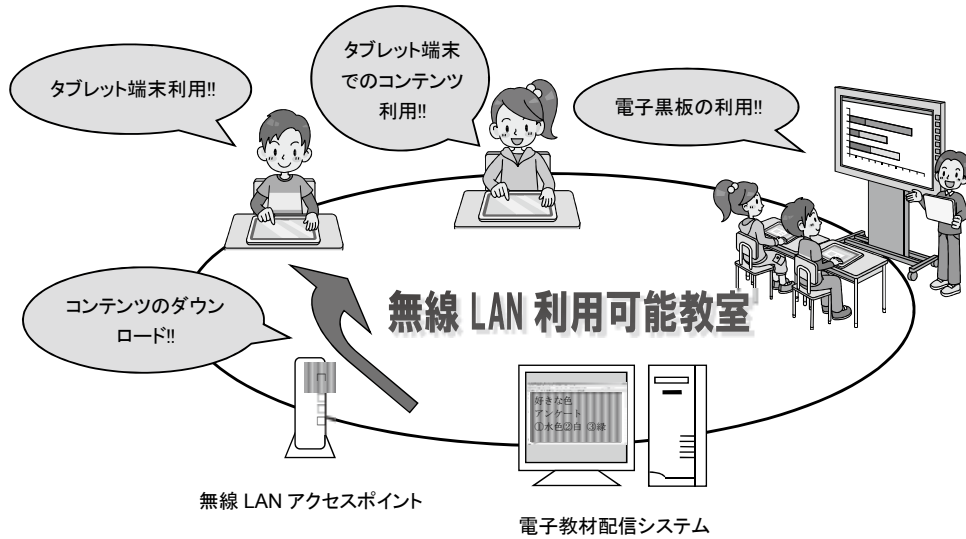


図5：ICT活用指導力養成支援環境

V. むすび

本稿では、三上達也教授の高等学校と大学・大学院の後輩である著者が、三上先生の人柄を表すエピソードとともに記した。また、身近に残る三上先生に関わる品を示して、追悼の気持ちを表した。さらに、三上先生のご支援があつて成立したと思われる著者の大学院時代の研究とその後の研究の概要を記した。

本稿を執筆するにおいて、三上先生を思い起こすことが、日常となり、今でも、そのあたりから「こら、塚本!! なにしてん??」といった三上さんの叱咤激励の声が聞こえてくるような気がする。そして、また、この9月で、三上さんとの年齢がまた縮まった。

参考文献

- 1) 三上達也、井上和夫：編曲システム MUSAS の基本構成－コード選択を重視した4パートメロディの獲得－；電子情報通信学会論文誌 D, Vol.71-D, No.6, pp.1109-1116(1988)
- 2) 三上達也：編曲システム MUSAS の問題解決における知識とその構造に関する研究；立命館大学博士論文 (1991)
- 3) 塚本 充：三次元形状の人間の概念形成と言葉による表現に関する研究；立命館大学博士論文 (1990)